

# 指定された分布に従 う乱数

モデリングとシミュレーション

2019年度

1

# 一様乱数から指定された分布に従う乱数へ

- シミュレーションにおいて、乱数の分布が指定される場合がある
  - 指数分布に従う乱数
    - でたらめな時間間隔で事象が発生する
  - 正規分布に従う乱数
    - ある平均値のまわりのでたらめな揺らぎ
- 変換法
- 棄却法

# 確率分布

## ■ 実数に対する分布

■ 実数は連続であることに注意

■ 「ある値になる確率」はあり得ない

## ■ 確率変数 $X \in [a, b)$ に対する確率分布

■  $a \leq X < x$  という「範囲」に対して確率を定義

$$F(x) = P(a \leq X < x)$$

# 確率密度

- ➡ 微小区間( $X \in [x, x + \Delta x)$ )に入る確率

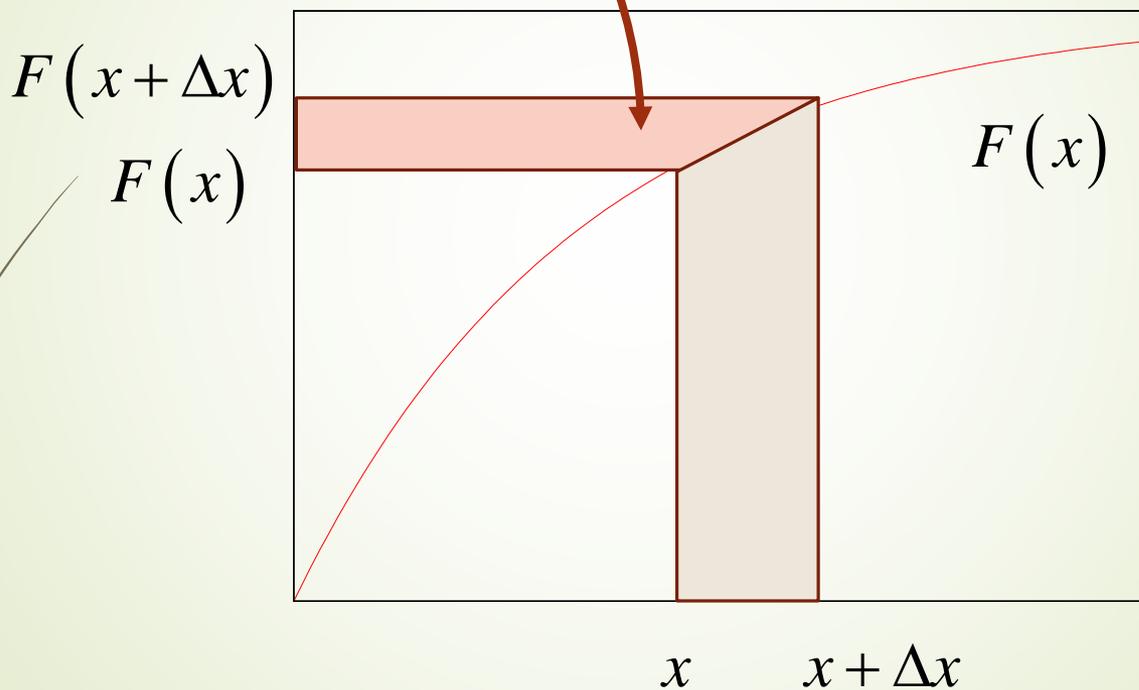
$$f(x) \Delta x = \frac{d}{dx} F(x) \Delta x$$

$$F(x) = \int_a^x f(y) dy$$

- ➡  $f(x)$ を確率密度と呼ぶ
  - ➡ 確率そのものでないことに注意
  - ➡ 区間幅を乗じて確率になる

$$\frac{F(x + \Delta x) - F(x)}{\Delta x} \simeq f(x)$$

$f(x)\Delta x$



# 変換法

➡  $r \in [0,1)$  の一様乱数を生成

➡  $x$  へ変換  $x = F^{-1}(r)$

➡  $[x, x + \Delta x)$  に入る確率

➡  $[F(x), F(x + \Delta x))$  の長さ

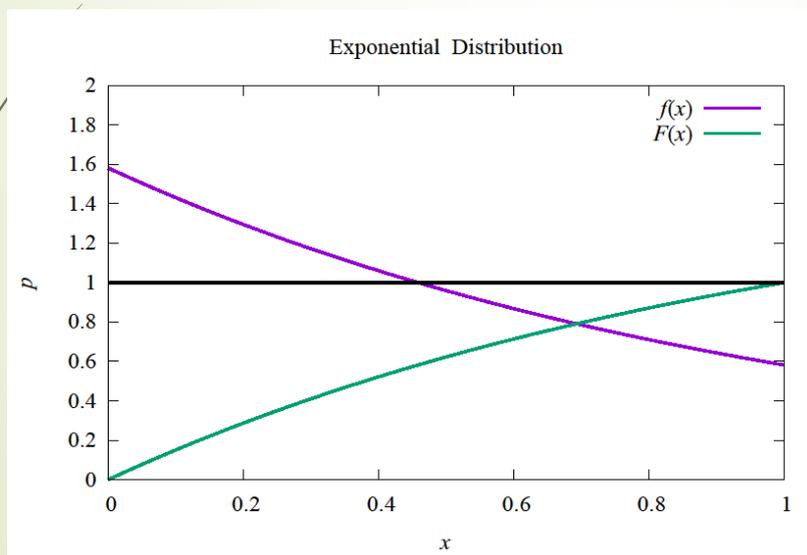
$$F(x + \Delta x) - F(x) = f(x)\Delta x + O(\Delta x^2)$$

➡ つまり、 $f(x)$  に従う乱数

# 例：指数分布

$$f(x) = Ae^{-x}, \quad 0 \leq x < 1, \quad A = \frac{e}{e-1}$$

$$F(x) = \int_0^x f(y) dy = A(1 - e^{-x})$$



$$F^{-1}(r) = -\ln(1 - r / A)$$

# 変換法の困難さ

- ▶ 変換法が使えるためには
  - ▶ 確率分布 $F(x)$ の表式を得られる
    - ▶ 確率密度の不定積分の表式が得られる
  - ▶ 確率分布の逆関数 $F^{-1}(x)$ の表式を得られる
- ▶ これらは、**かなり特殊**な場合

# 正規分布：特殊な例

$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} \exp\left(-\frac{x^2}{2\sigma^2}\right), \quad -\infty < x < \infty$$

- ▶ 不定積分は誤差関数と呼ばれ、表式は知られていない
  - ▶ 数表があるのみ
  - ▶ 単純な変換法は使えない
- ▶ 標準的な確率分布
  - ▶ よく使われる

➡ 二次元正規分布を考える

$$f(x, y) dx dy = \frac{1}{2\pi\sigma^2} \exp\left(-\frac{x^2 + y^2}{2\sigma^2}\right) dx dy$$

➡ 極座標へ変換  $\begin{cases} x = r \cos \theta \\ y = r \sin \theta \end{cases}$

$$f(r) r dr d\theta = \frac{1}{2\pi\sigma^2} r \exp\left(-\frac{r^2}{2\sigma^2}\right) dr d\theta$$

➡ 注 : Jacobian

$$\begin{vmatrix} \frac{\partial x}{\partial r} & \frac{\partial x}{\partial \theta} \\ \frac{\partial y}{\partial r} & \frac{\partial y}{\partial \theta} \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} \cos \theta & -r \sin \theta \\ \sin \theta & r \cos \theta \end{vmatrix} = r \cos^2 \theta + r \sin^2 \theta = r$$

$$\int_{-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} f(x, y) dx dy = \int_0^{\infty} \int_0^{2\pi} f(r \cos \theta, r \sin \theta) r dr d\theta$$

➡  $\theta$ 方向には一様であること

➡  $\theta$ 方向に積分  $f(r) r dr = \frac{1}{\sigma^2} r \exp\left(-\frac{r^2}{2\sigma^2}\right) dr$

➡ 動径方向の確率分布は積分可能

$$\rho = \int_0^r f(r') r' dr' = \int_0^r \frac{1}{\sigma^2} r' \exp\left(-\frac{r'^2}{2\sigma^2}\right) dr' = 1 - \exp\left(-\frac{r^2}{2\sigma^2}\right)$$

$$r = \sqrt{-2\sigma^2 \ln(1 - \rho)}$$

■ 二つの乱数  $(u, v)$ ,  $0 \leq u, v, < 1$

$$r = \sqrt{-2\sigma^2 \ln(1-u)}, \quad \theta = 2\pi v$$

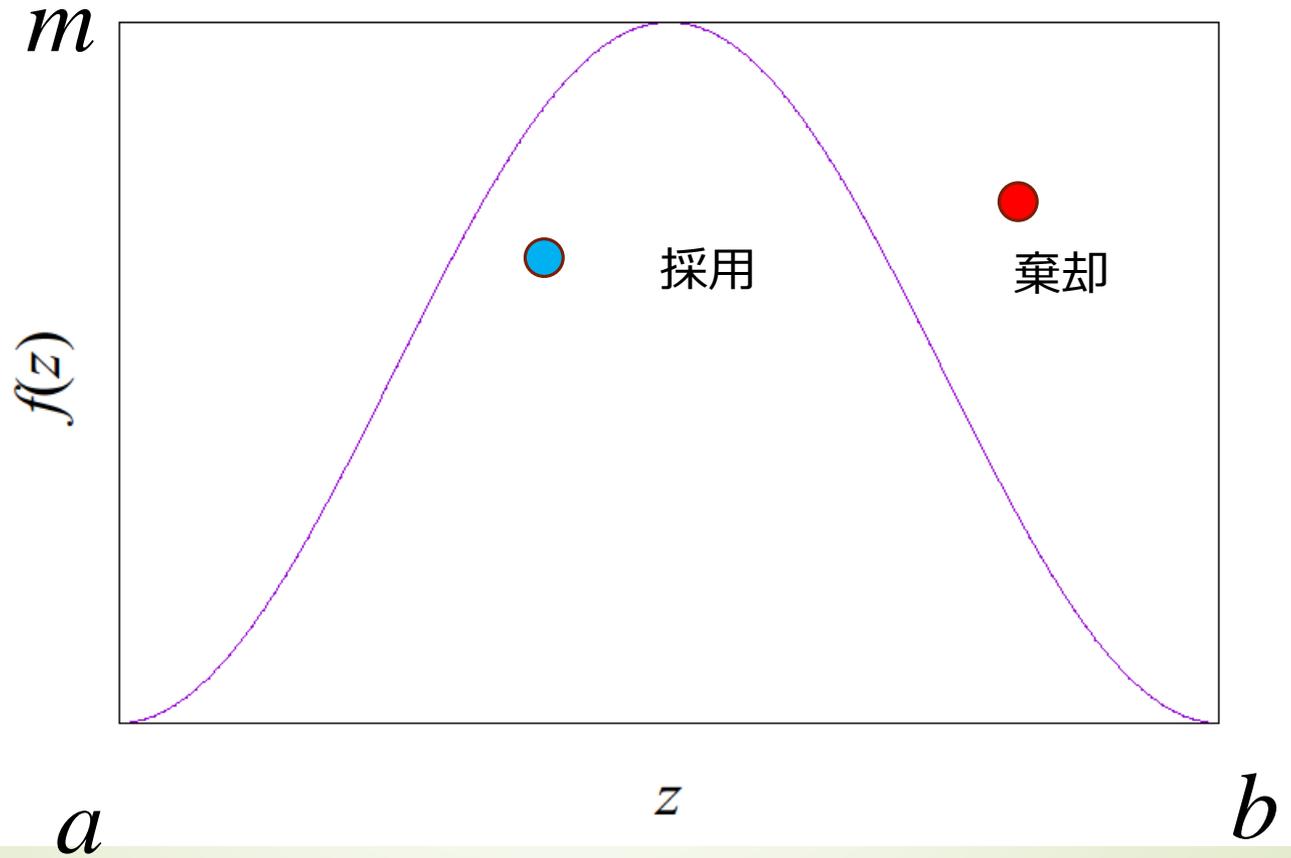
$$x = r \cos \theta$$

$$y = r \sin \theta$$

# 棄却法 (rejection method)

- ➡ 変換法で生成できない確率分布に対応
- ➡ 効率は悪いが、応用範囲が広い

1.  $f(z)$ 
  1. 定義域 :  $z \in [a, b)$ 、値域 :  $0 \leq f(z) < m$
2. 乱数生成  $(x, y) \in [0, 1)^2$
3.  $z = (b - a)x + a$
4.  $y < f(z)/m$ ならば $z$ を採用
5. それ以外ならば棄却
6. 次の乱数を生成 : 2へ戻る



# ヒストグラムと規格化

- ➡ ヒストグラムは区間毎の頻度、または相対頻度
- ➡ 確率密度関数と比較するには
  - ➡ 確率密度関数は規格化されている
  - ➡ 積分すると1になる
- ➡ ヒストグラムを規格化するには？

## ヒストグラムの規格化

bin の幅  $w$

bin の頻度  $h_i$

$$s = \sum h_i$$

$\frac{h_i}{s}$  : 相対頻度

$$g_i = \frac{1}{w} \frac{h_i}{s}$$

$$\sum w g_i = \frac{1}{sw} \sum w h_i = 1$$

